

## 抑留四年追想記

新潟県 佐藤 正平

### 一、ソ連軍侵攻から武装解除

#### (1) ソ連軍侵攻

昭和二十(一九四五)年八月九日早朝、突如非常呼集がかかり、三八式歩兵銃に弾込めして営庭に出ました。そのとき突然上空に爆音を立てながらの編隊が現われ、「シツユシツユ・パンパン」と、伏せの姿勢を取っていた我々の頭上を低空飛行で銃撃を浴びせつつ、土煙を残しながら、あっという間に東南方面に飛び去って行きました。まさに一瞬の出来事、これが戦鬪なのかと実感する暇もなく、恐怖心よりただ緊張のひとつときでした。幸い一人の犠牲者も出なかったのですが、無法なソ連機の侵攻を迎え討つのに三八式歩兵銃だとは情けないことだと感じました。

なぜかソ連の攻撃に遭遇したのはこの一回限りでした。

十二日に遇番士官に呼び出され、三十人編成分遣隊の一員となり、原隊と分かれて目的地の奉天(瀋陽)に向かいました。

北安を出発して十六日の朝、点呼で分隊長が「昨日来から日本が無条件降伏したというニュースが流れているが、これはすべてデマで謀略である。決して惑わされないように」という訓示がありました。少し前から広島への特殊爆弾とか、ソ連軍の侵攻を受けて何となく重苦しい雰囲気の中でしたが、まさか降伏とは思いつつ、傍らの見習士官を見ると、目を真っ赤にして涙を流しているではありませんか。私は、もしかするとこれは本当のことかもしれないと、複雑な感情に浸りました。

十八日、奉天飛行場に向かっていると、ソ連の兵隊が腰にマンドリンのような自動小銃を構えて、不気味な視線を我々に向けつつ、立ちほだ

かっているではありませんか。

初めてハッキリ日本の敗戦降伏を実感しつつ帯剣を外し銃を地上に下ろしました。

## (2) 奉天収容所

二、三日どうさまよったか定かでありませんが、やがて多くの将校、兵隊が丸腰のまま奉天のある大学の校舎に集結、収容されました。

しばらくは朝夕の点呼もなくブラブラ、その後、日に日に各部隊の将兵が集まり出し、校舎の中はいっぱい。皆不安の気持ちを抱きつつ過ごしていました。ある日隊長から「我が日本軍は不幸にして戦争に敗け武装解除されて、ソ連軍の監視下に置かれることになった。しかしまだ日本軍隊は厳然として存在する。もし逃亡を企てたり上官の命令に反抗した場合は日本の軍法会議にかけて処罰される。その際本人はもとより内地の家族・親族にまで累を及ぼすことになる、その覚悟でおれ。また今後ソ連軍の一兵卒に対しても反抗刺激

する態度をとってはならぬ、ソ連兵に会ったときは必ず自分から敬礼をするように」と注意がありました。

ある朝、私は部隊長が巡回しているソ連兵に向かって自ら挙手の礼をする姿を目撃してしまいました。何ということか、平素威厳を保ち我々に叱咤号令をかけていた陸軍大佐の態度、哀れやら情けない光景にしばし茫然としました。

そのうちに一人一人の身元調査が開始され、やがて私も呼び出され面接室に入りますと、そこにはソ連将校二人と朝鮮人の通訳一人がおりました。

尋問は姓名、生年月日、出身地、学歴、職歴に及び、特に職業の内容は詳しく問われ、それらが逐一カードに記入されていました。

調査が一週間以上も続いた後、新しく部隊編成の発表があり、校舎を出ることになりました。すわ帰国かと騒々しく半信半疑の希望を抱えて、各自でできるだけの毛布や被服類を梱包、背負って校

庭に集合しました。

大隊長の訓辞があつて行先不明示のまま、千人の部隊一団となつて校舎を後にしました。重い荷物を背負つて不安と希望の行軍となりました。

## 二、中央アジアへの貨車輸送と収容所

### (1) チルチックまでの貨車輸送

きつい行軍となりました。一体どこまで歩かせられるのかさっぱり分かりません。途中貨車や舟に食料・物産を積み込む使役もあり、これらの物品はすべて関東軍からの没収品です。

何日か過ぎて、ある駅に着くと、全員貨車への乗車を命じられました。

一車両に四十人、中は両側に板で二段に仕切られ、一見暗く狭く、四十人詰め込むとは、まさに動物のおりのごとくだと感じました。

毛布を広げ何とか席を確保、長い旅が始まりました。貨車は果たして西か東かどちらに向かつて走っているのか、不気味なほどの沈黙の静けさの

車内。ゴトンゴトン車輪の音が空しく響くばかりです。一縷の望みを抱きながらとうとうとしていると「西だ！ 西だ！」と何人かの叫び声が上がりました。「どうしてだ」「馬鹿な！」皆、がっかり、あきらめと憤怒に満ちた声をぶつけ合いました。車内の雰囲気は一遍に変わってきました。

その後貨車はノロノロ運転、一体どこまで我々を連れて行くかとしているのか。お先真つ暗です。果てしなく続く広野の中、時には止まり、時には走るといふ繰り返しの中、停車するとそこで炊事とか排せつ行為を行います。幾日か過ぎるとシラミがたかり始めて大変でした。大便中にもっぱらシラミ取り、まだ停車が野原のときは何事も無いのですが、街中近くの場合は住民から石のつぶて、逃げるに逃げられず情けない屈辱を味わいました。

出発して半月も過ぎたころ、空腹のあまり積み込まれていた大豆粕を失敬したことがあります。ところが夜中になつて腹を下し、走る貨車の

扉にすがりながら行為をする。危ないやら情けないやらのぶざまな仕儀となりました。

徐々に貨車の中の空気が変わってきました。密室の中で揺られつつ、確実に奥地に入ってきました。なので、完全に帰国の望みを失うことになり、絶望と不安のはけ口が連夜歌と踊りなどを繰り広げる始末となったのです。かつての関東軍の名誉も誇りも棄てた、情けない姿、私もドブプリこの輪の中に入っていました。

空腹と絶望、どうにでもなれのはざまの中で、昼は恥辱の姿を白日の下にさらし、夜は演芸のうさばらし。深夜は窮屈に身体を曲げつつまどろむという繰り返しが一カ月近くも続いたころ、ようやく目的地に到着したようです。

全員に一切の荷物を持って下車するように命じられました。ようやく我々捕虜の落ち着き場所が決まったようです。それにしても長い長い旅でした。ここがウズベク共和国のチルチック市の郊外でした。

## (2) 初期の収容所生活

周囲を有刺鉄線で囲んだ収容所の門をくぐりました。広い所にバラック建ての家が数棟、これが我々のねぐらかと思いつつ、重い腰を下ろしました。皆長途の貨車に揺られて来たので、やれやれとばかりホッとした気持ちです。

しばらくすると予期してなかった身体検査が始められるではありませんか。一人一人指定場所に行き、梱包していた荷物を全部広げ、上衣のボタンも外されての検査です。身につけた被服以外のものはすべて取り上げられています。見る見るうちに没収品が山のように積み重ねられていきます。

せっかく奉天で集められるだけの上等品を物色し、苦勞しながら持って来たのに、むざむざ取られ「こういうことだったのか」「やり方がひどい」「泥棒、詐欺だ」と口々に言うけれど、どうしようもない仕儀にて、悔し涙も出ない始末でした。それでも、後の検査に回る者たちは、下着類の重

ね着などいろいろ工夫、検査の目をごまかす要領のよきで、せめての慰めとしたようです。

全員の検査が終わり、例の緩慢な点呼もようやく終わって割り当てられた棟の室に入りました。

一室に二十人、五坪ほどの土間はコンクリート、床上は二段仕切りの板敷（下段は一メートルほど）で、薄いせんべい布団が人数分敷かれ、掛け布団は我々が持参した毛布二枚となっています。

日常の洗面、洗濯は戸外の鉄パイプの穴より噴出する水で。用便は別小屋で、扉はなく、床板に二十センチほどの穴でやる。一度に十四、五人ができるが、お互いに丸見えの有様で、とてもまともに見られる図ではありません。

### (3) 使役

しばらくは定まった作業はなく、朝点呼、朝食が終わると呼び出しを受け、収容所内の整備、農場の倉庫でのバレイシヨやトウモロコシの片付け、道路普請など様々な使役に駆り出されています。

した。当時は一日二食、それもほとんどコウリヤンか麦のお粥でしたからたまりません。皆できるだけ身体を動かさないように監視のソ連兵の目をかすめながら作業に従事しました。

一千人の捕虜集団、大隊長、中隊長、小隊長、班長と、軍隊組織のまま、将校は直接作業することなく、軍刀ならぬ指揮棒をかわりにして監督指揮に当たっていました。

使役作業で次のような出来事がありました。近くの河原から収容所内までの石運び作業のときです。石は収容所内の石垣や道路区画に使用するためのものです。従って五キログラムから十キログラムほどの石が要求されました。

距離は二百メートル強か、一中隊五百人全員が一人一人適当な石を拾って運びます。中隊長の号令の下、石運びが始まりましたが、例のごとく誰もがブラリブラリ、これ以上遅く歩けないという歩き方。まるで奴隷の群れが鎖につながれて歩く姿です。石一つを両腕に抱え込む者、巻脚絆で振

り分け荷物にする者、さまざまです。たまりかねたかソ連兵が「ダワイダワイ」「ヴステリ・ヴステリ」とわめきながら銃床で我々の尻をたたきまくりますが、多勢に無勢、どうにもなりません。

中隊長・小隊長も見て見ぬふりして見守るばかりです。ついにソ連の将校が怒りだし、中隊長にかみつきます。突然中隊長が「全員集合!」「これから全員一列になって手渡しで石運びを行う。配置につけ」と命令を下しました。そして「用意始め」の号令で作業が再開されました。と同時に「ヨイショ」「ヨイサ」の掛け声が出始め、やがて全員の大合唱となりました。するとソ連兵は驚きの目を、将校は手をたたいて喜びようを表わします。我々は一層声を張り上げます。中隊長も我が意を得たとばかりにはやし立てます。

しかし作業の威勢のよさに比べて集積される石の山は一向に大きくならないのです。時間を比較して一人一人で運んだときの量の半分にも及ばないのです。ソ連将校はそれに気づいたのか首をか

しげ、げげんな顔つきの仕草が徐々に激しくなってきました。中隊長も面目ないように苦笑いしながら「作業中止」「手渡し方法をやめて元のやり方にする」ということで、また各自一人一人のノロノロ作業に逆戻りしました。今度はなぜかソ連将校も看視兵も以前ほどやかましく言いませんでした。我々にとってささやかな優越感と自己満足を味わうことのできた使役の一日でした。

### 三、工場通勤作業と収容所生活

#### (1) 工場作業

十二月に入って雪のちらほら降り始めたころ、工場に連れて行かれました。

中に一步入って驚きました。機械の騒音と油煙り、まさにモーターのうなり、機械の回転と切削音が交錯する、工場特有の雰囲気です。

一瞬私は何とも言えない懐かしさを感じ取りました。次々に職場を指示され、我々十人には旋盤班への所属が命じられました。

ロシア人組長が私に米式ベルト掛六尺旋盤を操作するようにとの指示をしました。

かくして我々捕虜としての労働が定まったのです。ここに来て初めて満州の大学校舎への收容、面接調査、奥地への連行等々の意味、理由が理解納得でき得たのです。

工場は收容所から二、三十キロメートル離れたタシケント市郊外に建てられたコンプレッサーの製造組立一貫作業の工場で、従業員一万人、あらゆる種類の工作機械を備えた大工場です。多勢の男女ロシア人の仲間となつての工場通勤作業が始まりました。

## (2) ノルマ作業

工場作業は八時から五時まで、昼休み一時間、一週間ごとに夜勤となります。無蓋車で通勤、工場に着くと図面とカードが渡されます。図面は三角画法なので、見れば容易に理解できて、工程も立てられます。カードには加工個数、標準時間

(ノルマ)等が記載され、このカードを持って工具室、材料置場を回れば加工に必要な一切の材料・工具・測定具等が支給される仕組みになっています。与えられる仕事量は一日か二日分でいわゆる多種少量生産方式です。六尺旋盤は私の得意分野、しかも日ごとに加工部品が変わるので面白く、その後の二年有余の期間一度もノルマ一〇〇%を割ったことなく、しばしば一五〇%を超してハラショ・ラポートのマカロニを手にする事ができました。しかしノルマのことで度々次のようなことが起こりました。それは図面上全く同じ形状寸法の加工品であっても時々加工材が黄銅とステンレス材と異なることがありました。ところが材質が違ってても加工時間は同じに設定されているのです。

御承知のように黄銅とステンレス材では全く性質が違い切削加工時間も三倍以上の差が出ます。たまりかねて組長に抗議しますと、「わかつている、しかし私にもどうしようもないんだ」と両手

を広げ困った顔するのみ。つくづく矛盾を感じながら、ステレンス材と指定されたときは、不運とあきらめつつ懸命に努めました。

工場通勤作業も少し慣れてくると休み時間を利用しての内職造りが盛んになりました。

スプーン、フォークに始まり、たばこ入れ、湯飲みなど、何せずべての材料は豊富、工作機械もあらゆる種類を備えており、おまけに日本人の技術技能です。精巧見事の出来栄えの製品が生まれます。中にはそれをパン、煙草などと交換する者も現われました。

工場と一緒に働くロシア人男女とは自然に溶け込むことができました。最初から我々に対するさげすみも特別の同情もなく、普通に全く差別のない態度で接してくれました。昼夜交替勤務ですの、一台の機械をロシア人と共有します。従って、おのずから相手の技能を知ることができ、信頼関係も生まれてきました。一日の作業が終わると、機械をきれいに清掃、油を塗布し、ロシア人

たちと挨拶して帰途につきます。

工場通勤作業が始まってやや収容所内の空気が少し変わってきました。一中隊は工場通勤、二中隊は農場（コルホーズ）作業とそれぞれ定着してきたのを受けて、使役のころの自暴自棄、倦怠、サボタージュの動きが止み、少し落ち着き余裕のある態度になってきたのです。入浴も週一度の休日にできるようになりました。

### (3) 食と遊戯・娯楽・演芸

#### (イ) 食

工場通勤が開始されてようやく一日三食となりましたが、相変わらず量少なく空腹をかかえた毎日でした。従って工場での休み時間は野草取り。アカザが豊富にあり、私はこれを取って煮て食べましたが、あまり食べ過ぎて緑色の便が出る始末でした。

仲間はカエルや蛇、時には赤犬を追いかける光景もしばしば目にしました。また工場で隠し持つ



た被服類をパンと交換する者もあり、私もこれを何度かやりました。夜勤のとき収容所での夕食時、持参する弁当（麦粥とか黒パン）が支給されますが、ほとんどの者が一緒に食べてしまい、せめての満腹感を味わっていました。

食べ物とは恐ろしいもので、ある夕、食堂で分配方法をめぐって争いとなり、兵隊同士の刃傷ざたが起きたこともあります。また、黒パンをめぐって次のような騒動も起きました。

毎食中一回は黒パンとスープが支給されます。パン一・五か二キログラムを十人で分配することになります。ある日、古兵が食事当番を呼び出して「きさま、おれに何の恨みがあるんだ」と怒声とビンタを浴びせました。それはたまたま古兵にパンの耳の所が続けて二度配られた結果に腹を立てての行動であったとか。その後パンを分ける際は両耳を薄く切り十等分し、それを十等分したパンに盛りつけ、更にくじ引きして順番に分配する方法になりました。

#### (ロ) 遊戯・娯楽・演芸

工場作業に通い始めてから少し落ち着く雰囲気になったとしても、まだ思いがけない環境の激変と祖国・家族・抑留の先行き不透明なことなどが重なりあって、精神状態は全く不安定のままです。勢い我々のエネルギーは娯楽・演芸へと向かわざるを得ませんでした。

工場から帰り夕食が終わると室内遊戯となりました。工場の材料を使用して造ったトランプ、かるた、駒、マージャン牌などで遊びに夢中になりました。休日は食堂で歌や踊り、寸劇、落語、浪曲などそれぞれの芸達者の熱演に酔いしれます。そしてついには中隊長が率先劇団を結成、芝居が上演されるようになったのです。

おなじみ「臉の母」「名月赤城の山」「一本刀土俵入り」「森の石松」さらには創作時代劇まで上演されるようになりました。初演のときなどは想像もできない見事な舞台装置と衣装、役者の熱演ぶりに、しばし呆然、やがて満場拍手喝采、興奮

と熱狂のるつぼとなりました。久しぶりに収容所内に熱気があふれた一夜でした。

刺激された他の中隊長が対抗意識の現代劇一座を結成、やくざ芝居を取り上げ交互に上演するという盛況になってきました。

しかしこの娯楽遊戯・演劇ブームもしばらくして徐々に下火になってきました。出し物の種切れ、固定した役者・見る者とお互いのマンネリ化の飽きがやってくることも事実ですが、それよりも時間の経過とともに皆の意識が変わって来たのが第一の理由だと思えます。

人間性を取り戻してきたというか、一年も近くなりようやく日本人としての自覚と人間本来の思考力、判断力が働くようになってきたようです。

一年近く過ぎたころ、工場や農場から働き高にに応じてお金が支給されることになったと聞かされました。そしてこの支給方法をどうするかという集会が開かれたのです。いろいろな意見が出て、結局は大隊本部に一任、その後収容所全員を勘案

計算し各人に支給されましたが、私は毎月二十五〜三十ルーブルいただいた記憶があり、すべてパッと消えてゆきました。

#### 四、民主運動と民主教育

##### (1) 民生委員

最初のころ集まれば猥談とか食べ物の話、そして娯楽、遊戯に明け暮れていたのが、一年も過ぎたころから会話も変わってきました。

そのころ日本新聞が配布されるようになり、初めはだまされないぞとか無視する人が多かったです。徐々に読まれるようになってきました。そして二年目に入ったころ、突然大隊長以下少尉以上の将校が何の言葉もなく収容所から姿を消しました。どういう理由で、また、どこに連れていかれたのか、知る由もなく、その後の消息も皆目不明です。それを機に自発的に階級章も外され、旧軍隊組織は崩壊し、新たに民主的な収容所の運営となってきました。

また、そのころ新しく三人の民生委員がやって来ました。この三人はタシケント市に設けられた民主教育学校を修了して派遣されてきたそうです。その中の一人が炊事係として厨房に入りましたところ、とたんに食事の内容が変わってきました。素材は全く変わりないので、料理方法が変わり、特に休・祭日には羊羹とか饅頭などが追加され、皆を驚かせ喜ばせたのです。

他の民生委員の活動もあり、次第に民生委員に対する目、態度が変わり、民生委員室の出入りも盛んになって、信頼関係が助成されました。やがて民生委員の発議で青年行動隊が組織誕生しました。目的は民主運動の中核となって積極的に行動することと、社会主義思想の体得、そして所内の美化活動、壁新聞の発行、勉強会等です。私も直ちに参加しました。隊員は百人ほどで、別棟が与えられ起居を共にすることになりました。青年行動隊員は職場でも収容所内でも積極的に活動を広げることになり、徐々に収容所内に浸透していき

ました。

## (2) タシケント市の日本民主教育

入所以来三度目の正月（昭和二十三年）が過ぎたころ、私と他二人が民生委員の推選によって民主教育学校の教育を受けることになり、タシケント市に向かいました。学校は郊外にある捕虜収容所内にありました。生徒は各地区収容所から派遣された四十人ほどで、別棟に四班四室での同居生活です。日課としては作業、使役はなく、午前午後とも講義、夜は自習とかテーマを決めての討論会、反省会等をやっていました。講義課目は日本歴史、世界情勢、日本共産党と労働運動、マルクス・レーニン主義、ソ同盟共産党史など。講師は日本人四人と、ときどき朝鮮の一人が担当していました。この教育は四、五カ月ほどだったと思いますが、私も含めて皆真剣に勉強討論し合いました。教育期間が終わった時点で私は新たに史的唯物論などの知識を得たこともあって、日本の天

皇制教育、忠君愛国、大義等の思想に矛盾を感じたことは確かです。

教育終わって収容所に戻りますと幾ばくもなく収容所の移動が発表され、一時すわ帰国かと早合点する者もありました（無理ありません、日本新聞で帰還の記事が度々掲載されるようになったからです）。

出発に先立って全員に黒色木綿の上下衣が支給され、ようやく軍服とオサラバ、輸送貨車に乗車しました。九月初旬ころと記憶しています。

## 五、ナホトカへの移動と港湾工事他

### (1) ナホトカへの移動

今度の貨車は充分ゆとりのある広さで環境も悪くありませんでした。出発して十日ほどで目的地に着いたのか、ところが何と輸送貨車そのものが住居となったのです。何がなんだかさっぱり分かりません。とにかくナホトカ郊外でしばらく貨車上の生活となって、作業はもっぱら山野に赴き、

岩石崩し、地ならし開墾など。一方、一部の者は煉瓦の建築作業に従事しました。やがて日本人による煉瓦の家が完成しました。するとまさかと思っていたこの家に全員移住することになりました。嬉しいやら、これで帰国が延びてしまったのかと複雑な気持ちになりました。

### (2) 港湾工事作業

新しい収容所に入ったのは十二月近くだと思えますが、ここに収容されてから定作業が決まり、それはナホトカ港の整備作業で、山を発破で切り崩し、その岩石をトロッコで運び、港を埋立て拡張する工事でありました。

仕掛けの穴掘りと火薬発破による粉塵は物すごく、また岩石の運搬距離が次第に長くなり勾配も急坂となるので、かなりきつく危険な作業となります。特にレールの上を走るトロッコは猛スピードとなるので二人でカシの棒をブレーキにして必死の操作となります。

約十カ月ほど港湾工事に従事しましたが、帰国間近に一人の犠牲者が出てしまいました。発破をかける穴掘り作業中に、穴の出入の際に足を踏み外し転落死亡したとのこと。若くまだ童顔を残した少年で、痛ましい姿に全員涙を流し御冥福を祈りました。まさに帰国直前、戦争抑留の犠牲者であり、御家族の方のことを思うと言葉がなく、悲しい出来事でした。

### (3) ナホトカ港での民主運動

ナホトカの港湾工事中、帰還船の望見もあり、皆の気持ちが悪く着かない面もありましたが、反面、民主運動は加速してきました。民主教育も盛んになり、収容所内にも養成所ができて生徒を募集、専任指導員と起居を共にしての民主教育が行われました（もちろん港湾工事には従事）。そして他の全員に対しては各班ごとに教育担当者が設けられ、その担当者に民生委員の教育係が毎週一度本部（日本人代表民生委員会）に赴き教育を受

けて帰り、教育指導を行った後、担当者が班員に教育をするという仕組みになっておりました。

また、本部に民主リーダー養成所があり、各地区から選抜された者が参加し、教育を受けました。期間は二カ月と短期間でしたが、タシケント市の民主教育修了者より闘争的というか、いかにも革命者らしく活動がより積極的に展開されるようになりました。

従って収容所内の民主運動もより活発となり、並行して頻繁に批判集会（いわゆるつるし上げ）が行われるようになったのです。

民主教育の徹底、浸透により、戦前の憲兵や特高警察官に対する憎しみ憤りを倍加した人たち、そして民生委員が帰国も間近となったので一層の民主運動の盛り上がりを図るべくあおった結果でもあります。従ってこの批判集会の矢面に立たされるのは、元特高、憲兵、警察官であり、次に標的にされたのが窃盗者、サボタージュ者、民主運動の妨害者などでありました。行き過ぎの面も

あつたようです。

## 六、復員

### (1) スターリン大元帥への感謝状

昭和二十四年も半ば過ぎたころ、日本新聞でスターリン大元帥感謝署名文をささげようというキャンペーンが始められました。九月ごろでしようか、我々の収容所でも進められ、ある日署名文を納める箱物が公開されました。日本の神社を模型したもので、カヤ屋根、柱、畳、鳥居などが精巧・緻密に造られており驚きました。感謝文は巻紙に筆字で書かれており、署名は半紙一枚に二十人の筆連書です。皆順番に緊張した面持ちで署名していましたが、果たして胸中はどうであつたのか。

やがて十月に入り私を含めて何百人かに帰国者の待機する宿舎に移動する指示が出ました。民生委員長の「元気で日本に帰って下さい」という言葉に送られ宿舎入りしましたが、その時点ではま

だ特別の感情はわくことなく、安堵と期待と不安の交錯する複雑な思いでありました。宿舎には多勢の仲間がいました。

### (2) 帰国

宿舎での生活は一週間ほどで、連日教育指導を受けました。教材は日本新聞で、日本の現況や帰還状況の記事解説と帰国後の活動方法などです。

やがて乗船出発の時がやってきました。直前に本部民生委員のアジ演説を聞いて、十月二十二日、船が岸壁を離れました。

いよいよ帰国できるのだと思いつつもまだ実感となつてきません。それどころか早々に船酔いとなり、船倉に横になつて食事も寝たまま素手で口に入れる有様となりました。

十月二十五日朝、「日本だ！日本だ！」という声に促され、甲板上に出ました。「万歳、万歳」という声が一斉に上がります。

私は初めてそこで胸の締めつけられるような感

動を覚えました。今度こそ正真正銘日本に帰って来た。母や兄たちに会うことができるのだと、喜びの感動と涙があふれてきました。

### (3) 舞鶴から帰郷

出迎えの係員に導かれて舞鶴港の宿舎に入ると、いきなり白い粉を全身に振りかけられビックリ、これはDDTの消毒剤でした。それから入浴場に案内されあかを落とすと、新しい下着が用意され、とてもありがたかったです。四、五日間宿舎生活を過ごしたわけですが、今覚えているのは、身元調査と、帰り際に毛布一枚、服上下一着、現金二千元と乗車券を渡されたことです。

舞鶴駅から六日町駅、途中寅平兄が宮内駅におり、一緒に六日町駅で下車しました。駅頭に多勢の方々が歓迎に來られ、懐かしい人々との対面に思わず涙がこみ上げました。

### 七、復職から定年退職

召集入隊より丸五年、無事復員できました。

一カ月ほどブラブラ、この間に東京の仲間と連絡が取れたので、上京の準備として町の河川工事に出て、何がしかの賃金を稼ぎ、翌昭和二十五年三月上京、紆余曲折を経て旭精密株式会社（後に理研光学と合併、更に株式会社リコーとなる）に復職しました。ようやく生活も安定、昭和五十八年一月十四日定年退職、と同時に故郷六日町に居を構え、老妻と二人の生活、お互いまだ元気に暮らしております。

### 八、省みて

復職後のしばらくの間は「佐藤は捕虜ボケしたようだ」とも言われ、一時は抑留されたことを恨みもしましたが、年月が経るに従って金を出しても買えない貴重な体験ができたと思うようになりました。そしてシベリア方面に抑留されて長期間苛酷な労働に従事した方、また、かの地で亡くな

られた戦友とその御家族の方々に思いをはせると  
なおさらの感がいたします。

私は、抑留当初、無気力、怠惰の状態を続けて  
いるうちに、ある日、戦友にも刺激され「自分は  
どうあるべきか」と考えるようになりました。

「いずれ必ず日本に帰るときがくる。もしそのと  
き怠惰の習慣が身につけていたならどうなるか」  
「そうだ、ソ連のために働くのではない、自分自  
身のために汗を流すのだ」と、そう思いついた途  
端、それまで嫌々拒否していた使役、労働が、全  
く苦でなくなりました。人間、考え方、気の持  
ちようが変われば行動も変わるし楽になるという  
ことを実感したのです。以後これを座右の銘、心  
の支えにして今日まで来しました。

今更ながら抑留を体験できたことは私の人生に  
とって大きなプラスでありました。

### 【執筆者の紹介】

大正十二年一月十五日生

新潟県南魚沼郡六日町にて下駄商営む 父 辰  
蔵、母 ナヲの七男末子として生まる

昭和九年九月 下駄商破産し大谷金物店にお世話  
になり小学校に通う

昭和十年三月 六日町小学校卒業

昭和十二年四月 大谷家の厚意で六日町青年学校  
に入学

昭和十四年三月下旬 青雲の志やまず大谷家より  
暇をいただき上京する

昭和十四年三月三十日 東京足立区の飛行機特殊  
部品株式会社に入社 旋盤工となる

昭和十六年四月 神田電機学校機械科夜間部に入  
学 昭和十九年三月卒業

昭和十九年十月二十五日 召集令状により高田三  
十連隊に入営 同年十二月 満州国龍鎮の飛行  
十六大隊に配転

昭和二十年二月 北安の機関工手教育隊に派遣さ  
れ 同年五月原隊に復帰

昭和二十年八月九日 北安にてソ連軍の侵攻を受



け 同月十二日 奉天派遣分隊に編入され奉天  
に向かう

昭和二十年八月十八日 奉天にてソ連軍に武装解  
除され大学校舎に收容される

昭和二十年十月中旬 奉天を出発 貨車にてソ連  
ウズベク共和国に連行され 同年十一月中旬  
チルチック市郊外の捕虜收容所に入る

昭和二十年十二月中旬 タシケント市郊外のコン  
プレッサー製造工場の旋盤工としての労働に従  
事する

昭和二十三年九月中旬 ナホトカ港付近の收容所  
に移動 港湾工事に従事する

昭和二十四年十月二十二日 ナホトカ港を出発  
同月二十五日舞鶴港に復員

新潟県南魚沼郡六日町居住

昭和二十五年三月上京 同年四月一日より越前堀  
の光洋工業株式会社に臨時雇いとして入社 自  
動車修理に従事

昭和二十五年七月五日 大田区西馬込の旭精密工

業株式会社（後に理研光学と合併 更に株式会  
社リコーと社名変更）に復職 同社の寮に寄宿

昭和二十七年三月十一日 新潟県南魚沼郡六日町  
大字清水瀬 桑原タマと結婚 同月大田区仲池  
上に住居を構える

昭和四十四年九月 台湾理光彰化工場に派遣され  
工場長として勤務 同四十八年九月帰社 光機  
事業部製造部長勤務

昭和五十八年一月十四日 定年退職  
昭和五十八年四月二十七日、新潟県南魚沼郡六日  
町大字清水瀬に移住し家内と二人の生活にて現  
在に至る

（新潟県 大塚 茂）